

特別賞 三省堂書店賞

『タダイマトビラ』 村田沙耶香著

文学部 文学科1年 藤井 太雅

人間は、気づかないうちに常識や既成概念という呪いにかけている。そして、それは自分たちでかけた呪いだ。

例えば、「一日三食」というのも呪いである。日本人がその食生活を始めたのは、江戸時代に起こった明暦の大火以後のことらしい。荒んだ江戸の町を復興するために長時間働かされた人々の栄養がそれまでの一日二食の生活では賄えなくなり、一日三食の生活に移行したのである。「江戸時代の人々のように長時間力仕事をしない現代人が一日三食摂るのは食べ過ぎだ」という意見もある。しかしここで重要なのは、「一日三食は正しいかどうか」ではなく、多くの人々は思考を経て一日三食摂っているわけではない、つまり呪いにかけている、ということだ。

本書で扱っている呪いは「家族」についてである。家族はお互いに愛情を持って接するべきだ。母は誰でも「母性」を持っていて、子供に無条件の愛を注ぐことができる。子供の世話は愛情を持って行うべきだ。そのような既成概念を「それは本当に正しいことなのか。それ以外は間違っているのか」という根源的な問いとして捉え直すことで、著者はその呪いを解こうと試みている。

子供を愛せない母、愛人を持つ父、引きこもりの弟。そんな愛情のない家庭で育った少女、恵奈。恵奈は家族に愛されたいという欲望、すなわち「家族欲」を「カゾクヨナニー」という行為で処理していた。カーテンに「ニナオ」という名前を付けて擬人化し、家族にかけてもらいたい言葉をニナオにかけてもらったと錯覚することで「家族欲」を満たすのだ。そんな恵奈の目標は、「本当の恋」をして「本当の家族」を作ることだ。母が失敗した愛情のある家庭作りが人生の到達点なのである。誰もが抱いている願望を、恵奈も「普通の女の子」として持っていた。

高校生になると、恵奈は大学生の浩平と同棲を始める。結婚願望の強い浩平は恵奈に結婚を迫る。人生の目標が達成されるはずだったが、恵奈はあるきっかけで、やっと「本当の家族」という呪いを解かれるのである。人間が普遍的に抱く「家族」に対する理想。それはあくまで理想であって、現実にはありえない。恵奈は初めてそれに気付くのである。

そして本書の面白いところは、呪いを解いただけでは終わらず、呪いを解かれた人間がどうなるか、ということまで描かれていることだ。恵奈はその後、自分の脳で「家族」という概念を捉え直し、抜本的な大改革を起こそうとする。人間は、呪いを解かれて初めて己の脳で思考を開始するのだ。

人間がかかっている「呪い」は家族だけではないだろう。勉学に励むのは本当に良いことなのか。人に優しくするのは本当に良いことなのか。一日三食摂るのは本当に正しいことなのか。「タダイマトビラ」は根源的な問いを自分自身に投げかけ、思考する機会を与えてくれるだろう。